

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：37117

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21520061

研究課題名（和文） ジャイナ教文献研究深化のための『タルカ・パーシャー』翻訳研究

研究課題名（英文） An Annotated Translation of the *Jainatarkabhāṣā*

研究代表者

宇野 智行 (UNO TOMOYUKI)

筑紫女学園大学・文学部・准教授

研究者番号：40331011

研究成果の概要（和文）：

白衣派ジャイナ教学僧ヤショーヴィジャヤ（ca. 1624-1687）による綱要書『タルカ・パーシャー』の翻訳をすすめ、ジャイナ教認識論・論理学特有の術語や基礎となる理論について精査した。ヤショーヴィジャヤの術語解釈は、ジャイナ教の思想的発展を踏まえており、彼の知的源泉は白衣派聖典に対する諸注釈と論理期の独立作品に二分される。この先行文献の作者たちについては、前者がジナバドラ、ハリバドラ、マラダーリ・ヘーマチャンドラなど、後者がアカランカ、ヴィドゥヤーナンディン、デーヴァ・スーリなどであることが明らかとなった。『タルカ・パーシャー』翻訳については、全体分量の約 70% が完了しており、訳語の擦り合わせ作業ののち、訳注、索引、文献目録を付した上での出版を予定している。

研究成果の概要（英文）：

The members of this project team investigated the terminologies and basic theories appropriate to Jaina logic and epistemology, by making an annotated translation of the *Jainatarkabhāṣā*, a manual treatise of Śvetāmbara Jaina philosophy attributed to Yaśovijaya Gaṇi (ca. 1624-1687.). Yaśovijaya's interpretations of Jaina philosophy have historical antecedents of Jainism. The sources of his idea can be divided into two groups: exegetical commentaries on Jaina canons by Jinabhadra, Haribhadra and Maladhāri Hemaçandra, on the one hand, and independent works on logic by Akalaṅka, Vidyānandin and Devasūri, on the other. Up to seventy percent of the translation has been finished. After completing it, we are planning to make a publication with notes, index and bibliography.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600	480	2,080
2010年度	1,100	330	1,430
2011年度	800	240	1,040
年度			
年度			
総計	3,500	1,050	4,550

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 印度哲学・仏教学

キーワード：ヤショーヴィジャヤ、プラマーナ、ナヤ、ニクシェーパ、白衣派、ジナバドラ、デーヴァ・スーリ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本邦のインド認識論・論理学研究の発展には、二つの『タルカ・バーシャー』と名付けられた作品の翻訳研究が大きく寄与している。すなわち、松尾義海著『印度論理学の構造』(1948年)と梶山雄一著『論理のことば』(1975年:同書は『世界の名著2大乗仏典』所収「認識と論理」1967年の再刊であり、“An Introduction to Buddhist Philosophy: an annotated translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta.” *Memoirs of the Faculty of Letters, Kyoto University*. No.10, pp.1-173, 1966年を元にした和訳である)である。前者はニャーヤ学派のケーシャヴァ・ミシュラ、後者は仏教学僧モークシャーカーラグプタによる同名の綱要書『タルカ・バーシャー』の翻訳研究書である。これら両書は、ニャーヤ・ヴァイシェシカ学派の哲学的基礎理論や、大乗仏教の精緻な論理学についての格好の入門書となり、後進の研究者たちを裨益してきた。

しかしながら、『タルカ・バーシャー』と名付けられた論書は、ニャーヤ学派や仏教以外の作者によっても造られている。17世紀の白衣派ジャイナ教学僧ヤショーヴィジャヤ・ガニは、先行する二つの『タルカ・バーシャー』と同様に後進学徒の教科書となすべく、第三の『タルカ・バーシャー』を著した。彼の『タルカ・バーシャー』にも、弟子教育を目的とした綱要書として、ジャイナ教認識論・論理学の精髓が纏められている。ゆえに、先行する二つの翻訳研究書に倣って、ジャイナ教の『タルカ・バーシャー』を全訳することは、ジャイナ教研究の糸口となり、後々の研究深化を扶助することとなるはずである。このように、本研究課題は、インド学の中でも研究進捗が最も遅れた分野であるジャイナ教文献研究を資すべく企図されたのである。

(2) 研究代表者、連携研究者共に、ジャイナ教の認識論・論理学研究に携わりながら、他学派と隔絶した独自性をしばしば痛感してきた。特に、四十五部の聖典(アーガマ)という極めて閉鎖的なドグマを堅持する白衣派の文献は、他学派との思想的共通性を著しく欠いており、ジャイナ教独自の概念やタームを頻発して初学者の挑戦を阻んでいると言つてよい。そこで、ジャイナ教思想史においても最後発といえるヤショーヴィジャヤ(17世紀)の『タルカ・バーシャー』を読解テキストに選択し、ジャイナ教哲学の基礎的理論についての詳細な解説を付した形での翻訳提示を企図した。この翻訳により、ジャイナ教思想史を俯瞰した上で、彼らの最終的な理論解釈が提示できると考えたからである。

## 2. 研究の目的

翻訳研究の有益性は、単に翻訳を提示することのみによっては確保されえない。精確な翻訳だけでなく、そのテキストの思想的背景に至るまで関連資料を提示することは、後の研究に対する貢献は量り知れないものとなるはずである。さらには、対象となるテキストが取り扱うトピック全てに亘って、従来研究を網羅・提示することも研究入門書としての使命であろう。ゆえに、本研究は以下の三点を具体的目的として掲げる。

### (1) 客観的かつ精確な翻訳作成

『タルカ・バーシャー』はジャイナ教哲学発展の最後期にあたる、いわば最終形態を凝縮した綱要書である。直接知などのブラマナに始まり聖典解釈論(ニクシェーバ)に至るまで、テクニカル・タームの定義、解釈、他学派との論争などが簡潔な「ことば」(バーシャー)で纏められている。これらの術語や概念について、慎重な訳語選択を通じて全訳を提示し、ジャイナ教独自の哲学理論の全貌を明らかにする。

### (2) 全パラレル・テキストの収集読解

『タルカ・バーシャー』には様々な先行文献の引用・借用が見られ、いわばヤショーヴィジャヤに先行するジャイナ教文献のパッチワークとも言えるものである。ヤショーヴィジャヤは先行する論師たちの「ことば」を借りつつ、その解釈の最終形態を示していると言つてよい。これらの先行するパラレル・テキストを、(A) 聖典注釈文献 (B) 論理期の独立作品 (C) 他学派作品の三種にわたり、網羅的に収集し読解する。その結果として、ヤショーヴィジャヤに至るジャイナ教哲学の思想的基盤、他学派との論争史を明らかにする。

### (3) 先行研究網羅と文献目録作成

ジャイナ教が取り扱う哲学的トピックは広範広大でありながら、ヤショーヴィジャヤは『タルカ・バーシャー』にそのエッセンスを簡潔に纏めている。つまり、彼はジャイナ教哲学にとっての最重要課題を優先してトピックを厳選しており、ジャイナ教にとって欠く事のできない理論を集成したと言える。このようなジャイナ教哲学の基礎理論についての先行研究を近代インド諸語をも含めて網羅的に収集し、訳注に提示、評価を加える。また、(2)の一次資料と併せて、ジャイナ教哲学研究に必要な文献目録を作成する。

## 3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究では

研究代表者・連携研究者以外に五人の研究協力者の協力を仰ぎ、次のような研究体制を組織した。

研究統括(宇野智行)	プラマーナ(第1章)班 翻訳責任者:佐藤宏宗	
	聖典文献担当	河崎豊
	聖典注釈文献担当	宇野智行
	論理期独立作品担当	佐藤宏宗
	仏教文献担当	小林久泰
	六派哲学文献担当	江崎公児・川尻洋平
	ナヤ(第2章)班 翻訳責任者:宇野智行	
	聖典注釈文献担当	宇野智行
	論理期独立作品担当	佐藤宏宗
	ニクシェーパ(第3章)班 翻訳責任者:宇野智行	
	聖典文献担当	河崎豊
	聖典注釈文献担当	藤永伸・宇野智行
	論理期独立作品担当	佐藤宏宗
	文献目録作成班 責任者:宇野智行	
	近代ヨーロッパ諸語	河崎豊
	近代インド諸語	川尻洋平

(1) 『タルカ・バーシャー』テキスト読解  
 複数の研究者の参加の元に同一テキストについて読解・検討を加えることは、客観的かつ正確な翻訳作成には必要不可欠の作業である。『タルカ・バーシャー』は3章から構成されており、それぞれの章を宇野及び佐藤が翻訳責任者として試訳を作成し、輪読研究会を主催した。各章の輪読研究会には、上記の通り、計5名の研究協力者の参加を仰いだ。

(2) 関連文献の収集と読解  
 『タルカ・バーシャー』は先行する多くのジャイナ教論師たちの著作を基盤としている。なかでも、聖典注釈者マラダーリ・ヘーマチャンドラ(12世紀)の『ヴィシエーシャヴァシユヤカバーシャ・ブリハッド・ヴリッティ』と論理学者デーヴァ・スーリ(12世紀)の『プラマーナ・ナヤ・タットヴァローカ』および『スヤードヴァーダ・ラトナーカラ』は、テキスト中の随所に借用され、ヤショーヴィジャヤが彼らの著作を基礎としていることは間違いない。主に宇野はマラダーリ作品、佐藤はデーヴァ・スーリ作品について、パラレル・テキスト収集と読解を担当した。仏教論理学派のダルマキールティなどの作品、ニャーヤ学派のウダヤナなどの作品については、それぞれ小林、江崎が関連テキスト

の収集にあたった。ニクシェーパ章については、主に藤永がジナバドラなどの関連テキストを探り、翻訳を進めた。なお、全ての章に亘って、その思想的源泉を白衣派聖典に求めることが出来るものについては、聖典の元テキストについても考察を進め、主に河崎が担当した。

### (3) 文献目録作成

上記のような一次文献のパラレル・テキスト収集・読解を進めると共に、二次文献についても、研究組織全員によって、情報交換につとめた。この情報交換については、筑紫女学園大学サーバにおいて、本研究のためのメーリングリストを作成し、これを活用した。二次文献の収集と評価は、近代ヨーロッパ諸語による研究については河崎、近代インド諸語による研究については川尻がその任にあたり、適宜宇野がその評価をまとめた。

### (4) 研究会における翻訳擦り合わせ

上記(1)(2)(3)の作業を含め、2009年度に8回、2010年度に7回、2011年度に5回の研究会を開催し、その都度『タルカ・バーシャー』テキストと関連テキストを読解し、翻訳擦り合わせを行った。特にジャイナ教独自のタームの訳語選定にあたっては、研究組織全員の解釈、意見を集約した上で、慎重に決定するようつとめた。

## 4. 研究成果

### (1) 翻訳作成

『タルカ・バーシャー』翻訳の進捗度は下記の通りである。

- ①第1章(プラマーナ章)
  - ・試訳作成(完了)
  - ・翻訳擦り合わせ(約50%完了)
  - ・関連文献収集(完了)
  - ・関連文献読解(約50%完了)
  - ・二次文献収集(完了)
- ②第2章(ナヤ章)
  - ・試訳作成(完了)
  - ・翻訳擦り合わせ(完了)
  - ・関連文献収集(完了)
  - ・関連文献読解(約30%完了)
  - ・二次文献収集(未完了)
- ③第3章(ニクシェーパ章)
  - ・試訳作成(完了)
  - ・翻訳擦り合わせ(未完了)
  - ・関連文献収集(未完了)
  - ・関連文献読解(未完了)
  - ・二次文献収集(未完了)

上記の通り、翻訳および訳注の作成については、第1章の後半および第3章に遅れが目立つが、作業分量全体から見れば約70%が完了した。

## (2) 文献目録作成

上記(1)の通り、関連文献(一次資料)の収集については、第3章を除いて完了しており、パラレル・テキストを中心として思想史発展を裏付けるサンスクリット・ブラスクリット資料の殆どは網羅した上で目録を作成済みである。ただし、二次文献の収集については、第1章(プラマーナ章)以外は未完了であり、従来研究の評価も加えた形での作業が必要である。特に現代インド諸語による学術書・論文等に関しては、今後も集中的に作業を続行する必要がある。

## (3) 新しい知見

本研究課題によって新たに明らかになった個別的な成果については、研究代表者、連携研究者だけに限らず、研究協力者にも論文という形で公表する方針をとった。以下に個別的な成果を記す。

①従来の研究では五知のうち‘*mati*」を「感官知」、‘*śruta*」を「聖典知」と訳されていたが、聖典注釈文献によれば、感官とマナスを原因とする知のうち「言葉に従うもの」(śrutānusārin)を‘*śruta*」、 「言葉に従わないもの」(aśrutānusārin)を‘*mati*」と解釈している。ゆえに、‘*mati*」はマナスに基づく知を含み、また‘*śruta*」は広く言葉に従う知であって単に聖典に限定されるものではない。ゆえに、前者は「感覚知」、後者は「言語知」と訳すのが精確であると考えられる。

②ヤショーヴィジャヤによる‘*pratyakṣa*」という語の派生説明は、‘*akṣa*」を「ジーヴァ」と解釈する『バーシャ』文献群に説かれる伝統的解釈を源泉としている。特に、その文法的解釈はジナバドラーによって開始され、ヤショーヴィジャヤはジナバドラー説を全面的に借用している。‘*akṣa*」を「感覚器官」と解釈する見解は、『チュールニ』文献を嚆矢としており、主にプラマーナ論の伝統内で継承され、ヤショーヴィジャヤに至っている。

③ヤショーヴィジャヤによれば、‘*vyāñjanāvagraha*」とは、「感覚器官による対象についての感受」「感覚器官による感覚器官と対象との結びつきについての感受」などの解釈の可能性を残し、これらはジナバドラーをはじめとする先師たちの解釈を直接継承した結果である。また、ヤショーヴィジャヤは「感覚器官と対象との結びつき」という解釈も提示しており、この解釈は彼の独創である。

④『タルカ・バーシャー』に展開される到達作用説は、感覚器官にもたらされる「害・益」の有無によって、対象と感覚器官の接触/非

接触が判断される。この議論の源泉は全てジナバドラーに遡り、ヤショーヴィジャヤは、注釈者マラダーリ・ヘーマチャンドラーの言明を全面的に支持し、これを簡略化している。

⑤ジナバドラーの到達作用説においては、耳・鼻・舌・皮膚という四つの感覚器官の場に、それらの対象が到来して接触が起こる。したがって、ジナバドラーはこれら四つの感覚器官を‘*prāptakārin*」と呼んでおり、感覚器官が対象の場に到達することを意図する‘*prāpyakārin*」という語を使用しない。

⑥ヤショーヴィジャヤの述べる到達作用説に関わる「夢遊状態」の例は、直接的にはジナバドラー作品を借用しているが、サンガダーサの『ブリハットカルパ・バーシャ』、作者不詳の『ニシーハ・バーシャ』が提示する例が嚆矢となっている。ただしこれらの文献は、到達作用説とは関連がなく、殺生などの罪を犯す原因である「不注意」(*pramāda*)の一つとして「夢遊状態」が説かれている。

⑦対象感受の段階での把握内容が「存在性」のみであることは、『ナンディー・スートラ』第58スートラに対するジナバドラー、ハリバドラーらの注釈者の解釈に端を発する。ジナバドラーらは、同スートラに説かれる「目覚ましの喩例」「素焼き壺の喩例」を解釈する際に、接触感受を単なる感覚器官と対象との接触段階、対象感受を対象の存在性把握段階と理解している。

⑧意欲(*īha*)の本質は、実際に存在している特殊を取り、実際には存在していない特殊を捨てるという取捨選択行為そのものである。この取捨選択行為に従事している段階が意欲であり、この行為が完了すれば判断(*avāya*)の段階に至ったこととなる。

⑨意欲と疑惑(*saṁśaya*)の相違は、前者が知、後者が非知であるという点にある。前者は、取捨選択行為に従事し、判断という確定知へと「向かっている」(*abhimukha*)ものである。一方、後者は複数の特殊を認識の拠り所としたままの段階であり、それらの特殊に対して何ら確定に向かう働きを持たないものと理解される。

⑩言語知(*śrutajñāna*)は、本来的には「聞かれたもの」(*śruta*)という語義に従うが、ジャイナ教ではこれを14種に分類する。この14分類は、実体の観点からの分類と言える。文字、字音、しぐさ、聖典、聖典外の書物など、知をもたらしうる実体が主な分類項となっているからである。

⑪ジャイナ教における「アーガマ」とは、救

世主 (tirthankara) の「知の内容」(artha) を源泉として、ガナダラが「スートラ」(sūtra) に纏め、そのスートラを保持する「サンガ」(saṅgha) に継承されてゆく過程の総体と言ってよい。「知の内容」「スートラ」「サンガ」全てが「アーガマ」と呼びうるものであり、知の継承そのもののことと理解される。

⑫『タルカ・バーシャー』のナヤ説は、その基本的分類(七分法)についてはデーヴァ・スーリの解釈に従っている。ただし、デーヴァ・スーリはヴィドゥヤーナンディンの『タットヴァールタ・シュローカヴァールティカ』のナヤ解釈を模倣しており、ヤショーヴィジャヤの知的源泉はヴィドゥヤーナンディンと言える。

⑬ヤショーヴィジャヤは、ヴィドゥヤーナンディンに端を発する論理期のナヤ説のみに言及する訳ではない。「アルピタ/アナルピタ」「ニシュチャヤ/ヴァヴァハーラ」などの二分法は、白衣派の伝統的認識論に属する分類法であり、これはジナバドラらの白衣派論師たちの見解をヤショーヴィジャヤが踏襲したものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ①宇野智行, 「白衣派ジャイナ教文献における到達作用説」, 『ジャイナ教研究』, 査読有, 第 17 号, 2011, pp.19-43.
- ②佐藤宏宗, “An Analytical Report on Yaśovijaya’s Theory of Parokṣa: the Classification of Pramāṇa in Late Jainism.”, 『ジャイナ教研究』, 査読有, 第 17 号, 2011, pp.1-18.
- ③小林久泰 (研究協力者), 「ジャイナ教文献に見られる夢遊病の症例」, 『ジャイナ教研究』, 査読有, 第 17 号, 2011, pp.47-81.
- ④宇野智行, 「ジャイナアーガマ覚え書～聖典と知の関連～」, 『人間文化研究所年報 (筑紫女学園大学)』, 査読無, 第 22 号, 2011, pp.1-15.
- ⑤小林久泰 (研究協力者), 「ジャイナ教の五知説—mati と śruta—」, 『人間文化研究所年報 (筑紫女学園大学)』, 査読無, 第 22 号, 2011, pp.17-29.
- ⑥宇野智行, 「ジナバドラによる直接知 (pratyakṣa) の再編成」, 『人間文化研究所年報 (筑紫女学園大学)』, 査読無, 第 21 号, 2010, pp.71-93.
- ⑦川尻洋平 (研究協力者), 「ヤショーヴィジャヤの vyañjanāvagraha 解釈とその源泉」, 『人間文化研究所年報 (筑紫女学園大学)』,

査読無, 第 21 号, 2010, pp.95-113.

[学会発表] (計 3 件)

- ①宇野智行, 「白衣派ジャイナ教文献における prāpyakārivāda」, ジャイナ教研究会, 2010 年 9 月 25 日, 大谷大学.
- ②小林久泰 (研究協力者), 「ジャイナ教文献に見られる夢遊病の症例」, ジャイナ教研究会, 2010 年 9 月 25 日, 大谷大学.
- ③宇野智行, “On Bhadrabāhu’s Logic.” The 14th International Sanskrit Conference, 2009 年 9 月 2 日, 京都大学.

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計◇件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
宇野 智行 (UNO TOMOYUKI)  
筑紫女学園大学・文学部・准教授  
研究者番号: 40331011
- (2) 研究分担者  
( )  
研究者番号:
- (3) 連携研究者  
佐藤 宏宗 (SATO KOJU)  
(財) 東方研究会・研究員  
研究者番号: 60300795
- (4) 研究協力者

藤永伸 (FUJINAGA SIN)  
都城工業高等専門学校・教授

河崎豊 (KAWASAKI YUTAKA)  
大谷大学・助教

小林久泰 (KOBAYASHI HISAYASU)  
筑紫女学園大学・人間文化研究所・リサーチ  
アシリエイト

江崎公児 (EZAKI KOJI)  
日本学術振興会・特別研究員

川尻洋平 (KAWAJIRI YOHEI)  
日本学術振興会・特別研究員